

ミニ展示「戦後80年 あのと き新聞は何を伝えたか」

1945年7月

2025.6.24

	1945年7月の出来事	新聞名	新聞日付	キャプション説明
①	ラウレル比島大統領来訪	毎日新聞	1945年7月2日	日本に亡命中のフィリピン大統領ホセ・ラウレルが、天皇や首相・鈴木貫太郎と会見したことを伝える。日本統治下のフィリピンで、1943年11月から大統領を務めていたラウレルは、戦局悪化に伴い、45年3月にルソン島を脱出、台湾経由で日本に亡命。終戦後は日本に協力的であったとして巣鴨拘置所に収監された。
②	敵、本土を本格空襲	毎日新聞	1945年7月8日	マリアナ諸島、硫黄島、沖縄の3つの拠点から発進した米軍機が、関東の中小都市や東海・近畿地方に激しい爆撃を加えていると報じている。日本が本土の制空権を失っていることや、本土上陸の可能性が高まっていることなどが伝わる。その一方、同じ面に「けふ、大詔奉戴日」という記事があり、日米開戦時の詔書全文を掲載。敗戦間近を予感させる戦況報道と戦意高揚記事が隣接する。
③	敵 本州に初の艦砲射撃	読売報知	1945年7月15日	岩手県釜石市が米軍の艦砲射撃を受けたことを伝える。本州に対する初の艦砲射撃だった。釜石は8月9日にも艦砲射撃を受け、2度の攻撃で756人が犠牲となった。鉄鉱石の供給地、鉄の生産地であったために、重要な軍事拠点として標的にされた。
④	三頭会談愈々開幕	読売報知	1945年7月17日	アメリカ大統領トルーマン、イギリス首相チャーチル、ソ連共産党書記長スターリンによる首脳会談が、ドイツのベルリン郊外ポツダムで開催されることを伝える。ドイツの敗戦に伴うドイツ国内の統治方式や賠償の支払い方法に関すること、連合国の支配地域の戦後処理などを会談の主な議題として挙げている。
⑤	対日共同声明か 三頭会談	朝日新聞	1945年7月27日	米・英・ソ連の3国が、ポツダム会談で日本政府に対する共同宣言を行うことを決定したことを伝える記事。海外紙をもとに同盟通信のストックホルム支局から発信された。元同盟通信記者・佐々木凉一氏の回顧録によると、中立国の一つであるスウェーデンでは、米英の新聞、雑誌も入手が容易で、同盟記者がそうした新聞を読み電文を作成、電信局へ持ち込んで打電してもらっていたという（「日本記者クラブ会報306号」1995年8月10日）。
⑥	政府は黙殺	朝日新聞	1945年7月28日	米・英・中の3国連名で発表された、日本に降伏を求める宣言「ポツダム宣言」の内容と政府の対応を伝える一連の記事。日本は短波放送で宣言を傍受、首相・鈴木貫太郎は記者会見で「ただ黙殺するだけである」と語った。同盟通信の英文記事は「黙殺」を「ignore（無視する）」と訳したが、APなど一部の海外通信社は「reject（拒否する）」と表現、米紙ニューヨーク・タイムズなどAP電の掲載紙に「拒否」という言葉が登場した。アメリカ政府も日本が宣言を拒否したと解釈、その後の原爆投下の理由にした。
⑦	いま大臣がこれを言ったら・・・ 芋蔓や桑葉等で食用粉 ― これで浮くお米は百万石以上 活かさう 未利用資源 ― どんぐりや野菜の粉食 お奨め	朝日新聞	1945年7月5日	主要食糧の配給―割削減の政策（右上記事「―削減と食生活新設計」）を受け、さつまいものつるやどんぐりのほか、タンポポ、よもぎ、あかざ、いたどりなどの野草の粉食を、厚生省の「戦時生活問題協議会」の常務理事が勧める。米は1941年に配給制になっていたが、戦争末期には配給の米も入手困難となっていた。併せて農商省の研究所技手が代用食の食べ方を紹介する記事も掲載した。政府や識者は国民から「主食＝米」という意識をそらそうと、さまざまな代用食のアイデアやレシピを新聞・婦人雑誌などで紹介していた。
⑧	「戦友愛」として融和を求めるが・・・ 水に流せぬか 疎開地のいざこざ	読売報知	1945年7月23日	疎開者と疎開先の住民との間でトラブルが起きているという。「都会人は夜遅くまでギャアギャア騒ぎ、朝は寝坊する」「農村人は盗難事件があると都会人を真っ先に疑う」など、それぞれの言い分を紹介する。平時でも生活水準、生活環境が異なる人々が短期間で打ち解けることは難しい。都市部への爆撃は激化する一方。「戦友愛」として融和を求めているが、落ち着いた状況でそこまで求められても・・・。
⑨	敵に狙われているのは「私」なのか？ 夏と共に忘れた防空服装	読売報知	1945年7月24日	「白シャツ」「半ズボン」といった軽装は「爆弾を呼ぶ」らしい。夏の暑さにより、防空服装がおろそかになっていると注意を促す。若い女性の「真白な服装や紅色などの派手な服装」も、直射日光にかかると上空の敵機に見つかりやすく危険だとか。地域一帯を標的とする絨毯爆撃（無差別爆撃）が繰り返されていた当時、個人レベルで防空意識を高めたとしても、どれほど効果があるのか。市民の「風紀の乱れ」に苦言を呈したかっただけか。
⑩	ジャーナリスト、生活の工夫を語る 自炊もまた楽し	朝日新聞	1945年7月31日	明治・大正・昭和にかけて活躍した新聞記者・言論人の長谷川如是閑による寄稿。壕舎生活については、登山のテント生活の経験があるため「少しも苦にならない」、壕生活の自炊については「乏しい材料を出るだけ栄養化することをつづけた経験があるので、少しもまごつかない」と、楽観的に乗り切る自身の様子を伝える。長谷川は大阪朝日新聞社会部の基礎を築いたが、1918（大正7）年8月の「白虹筆禍事件」の責任をとり鳥居素川ら幹部とともに退社、その後はフリーランスの記者として一生を通した。